

城下町・宿場町 おだわらの町名・地名

町人地

東海道筋の通り道

1 新宿町（しんしくちょう）

江戸時代前期、この町は、城の大手口の変更によって東海道が北寄りに付けかえられた時にできた新町です。町は城下の出入り口である「山王口」に接していたので、藩主帰城の時の出迎え場所であったほか、郷宿（ごうやど：公用で藩御所などへ出向く村人が泊まる宿屋）や茶店が並び、城下に2軒あった小田原町ちょうちんづくりの家のうち1軒がありました。

この町の名の初出は、正保2年（1645）の藩主稲葉氏の「自分日記」に「新宿足軽小屋」、「新宿通町御藩所」などがあります。

このように、早くから城下の東の出入り口であることを示しています。

天保初期（1830年代）、町内の戸数は124軒でした。

2 万町（よろっちょう）

この町は、藩主稲葉氏の「永代日記」、承応3年（1654）の記事に初めて町名が見られます。町名は、古くから「よろっちょう」とよばれていました。

町内には、藩主帰城のときの藩御用町人の出迎え場があったほか、「七里役所」という紀州（和歌山）藩の飛脚継立所がありました。江戸時代末期には、旅籠（はたご）が5件ほどあり、城下に2軒あった小田原ちょうちんづくりの家の1軒がありました。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は105軒でした。

3 高梨町（たかなしちょう）

この町は、藩主稲葉氏の「永代日記」、承応3年（1654）の記事に初めて町名が見られます。

「新編相模国風土記稿」（1841年）をみると、町内に「鎌倉屋敷」という小町があり、小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））からの大商人鎌倉屋の持地があったためと伝えているので、古くから商家や旅籠がならんでいたようです。町の中央寄りには、「下の問屋場（人足や馬による輸送の取り次ぎ所）」があり、中宿町の「上の問屋場」と10日交代で勤めていました。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は58軒でした。

4 宮前町（みやのまえちょう）

この町は、「北条氏康朱印状」（1566年）に初めて町名が見られます。この頃、この町は「上町」、「下町」に分かれていたと伝えられていますが、その区分けは明らかではありません。

江戸時代には、東海道に面した町の西側に城主専用の出入り口である「浜手門」と「高札場（こうさつば：幕府の法令などを掲示する場所のこと）」があり、同時代末期、町内には、

本陣（ほんじん：街道の宿場に置かれた大名、公家、幕府役人などのための旅館）1軒（大清水）、脇本陣（わきほんじん：本陣の予備にあてられた街道の宿舎で、本陣にあきのない時に大名などが利用した旅館）2軒、旅籠が23軒ほどあって、隣の本町とともに小田原宿の中心でありました。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は、42軒でした。

5 本町（ほんちょう）

この町は、藩主稲葉氏の「永代日記」、承応2年（1653）の記事に初めて町名が見られます。

「新編相模国風土記稿」（1841年）をみると、小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））、この町は、「通小路」といわれていましたが、江戸時代前期にこの町を基準にして、城下の町人町を左右に町割りしたとき、「本町」と改められました。隣の宮前町とともに、小田原宿の中心で、江戸時代末期には、本陣（ほんじん：街道の宿場に置かれた大名、公家、幕府役人などのための旅館）2軒（窪田・松本……のち片岡）、脇本陣（わきほんじん：本陣の予備にあてられた街道の宿舎で、本陣にあきのない時に大名などが利用した旅館）2軒、旅籠が26軒ほどありました。

この町と宮前町との境にある「市場横町」には、宿内の魚座商人（魚商人の同業組合）の市がたち、魚座屋敷がありました。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は41軒でした。

6 中宿町（なかじくちょう）

この町は、「貞享三年御引渡記録」（1686年）に初めて町名が見られます。

「新編相模国風土記稿」（1841年）には、この町に小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））、この町は、「上の問屋場」が置かれ、高梨町の「下の問屋場」と10日交代で勤めたとあります。

町内には、御用商人の「小西家」があり、嘉永年間（1848～53年）には、脇本陣（わきほんじん：本陣の予備にあてられた街道の宿舎で、本陣にあきのない時に大名などが利用した旅館）1軒、旅籠が11軒ほどありました。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は30軒でした。

7 欄干橋町（らんかんばしちょう）

この町は、「北条家朱印状」（1572年）に初めて町名が見られます。

この町名の由来は、この町から城内にかけられていた橋の名前によりついたといわれています。町内には、小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））からの旧家「外郎（ういろう）家」（永正元年（1504）、北条早雲の招きに応じて京都から小田原に移り住み、祖先伝来の秘薬「透項香（とうちんこう）」を製造販売しました。）があり、江戸時代末期には、本陣（ほんじん：街道の宿場に置かれた大名、公家、幕府役人などのための旅館）1軒、旅籠が26軒ほどありました。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は39軒でした。

8 筋違橋町（すじかいばしちょう）

この町は、藩主稲葉氏の「永代日記」、承応3年（1654）の記事に初めて町名が見られます。

この町は、橋の名が町名になっていますが、橋についての史料は見当たりません。町内の東海道筋を西から武家屋敷の並ぶ「諸白小路（もろはくこうじ）」、「狩野殿小路（かのどのこうじ）」、「安斎小路（あんさいこうじ）」が南へ延びています。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は85軒でした。

9 山角町（やまかくちょう）

この町は、寛永14年（1637）の文書に初めて町名が見られます。

町名の由来は、「新編相模国風土記稿」（1841年）によると小田原北条氏家臣「山角氏」（北条早雲が駿河へきたときに同行した武士の一人で、北条氏の歴代に仕えた重臣の一族）の屋敷があったためとしています。

町内には、小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））から畳職人、屋根職人の頭などが多く住んでいたと伝えられています。東海道筋の西から武家屋敷が並ぶ「御厩小路（おうまやこうじ）」、「天神小路（てんじんこうじ）」が南へ延びています。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は88軒でした。

東海道筋の脇道

10 古新宿町（こしんしくちょう）

この町は、「貞享三年御引渡記録」（1686年）に初めて町名が見られます。

ここは、もと新宿町とよばれていましたが、江戸時代前期、東海道が町の北寄りにつけかえられたとき、新たな東海道沿いに町ができ、これを新宿町としたためにこの町を古新宿町と改めたといわれています。

この町は、千度小路（せんどこうじ）とともに漁業の中心地で、町内の小町、「鍋町（なべちょう）」は、小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））から鋳物師の居住地でした。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は142軒で、廻船2艘がありました。

11 千度小路（せんどこうじ）

この町は、漁業関係文書（1654年）に初めて町名が見られます。

これより前の「北条家朱印状」（1572年）に「船方村」の名があり、この町のことといわれています。小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））に漁村として形成され、江戸時代においても城下の漁業、廻船業、魚商の拠点でありました。なお、明治以降昭和43年までここに魚市場がありました。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は107軒で、漁船が52艘ありました。

1 2 代官町（だいかんちょう）

この町は、「貞享三年御引渡記録」（1686年）に初めて町名が見られますが、これより前の小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））には、「代官小路（だいかんこうじ）」と呼ばれていました。江戸時代には、魚座（魚像商人の同業組合）商人が多く、魚座名主も住んでいました。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は86軒で、このうち魚座役が27軒もありました。

1 3 茶畑町（ちゃばたけちょう）

この町は、「貞享三年御引渡記録」（1686年）に初めて町名が見られますが、町名の由来は明らかではありません。

町には、郷宿（ごうやど：公用で藩役所などへ出向く村人が泊まる宿屋）があり、海に近いこともあって漁業、廻船業者も住んでいました。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は82軒でした。

東海道筋の横町及び小町名

1 4 十王町・抹香町（じゅうおうちょう・まっこうちょう）

十王町は、小田原城絵図の一つである「万治図」（1660年）に初めて地名が見られます。この地名の由来は、この地が教徳寺の門前で同寺に十王像（死者のさまよい行く世界でその者の生前の罪を裁く10人の王をいい、その像）が安置されていたからといわれています。

また、この付近の武家地を含んで「抹香町」ともいいました。この地名は、小田原城絵図に表示がなく、明治以後の記録に初めて見られます。

この地名の由来は、近くに十王堂（閻魔堂（えんまどう））やお寺が多く、線香のけむりが絶えなかったことによるといわれています。

1 5 鍋町（なべちょう）

鍋町は、その範囲がはっきりしていませんが、古新宿町と新宿町の一部を含む小町です。小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））から、町には鋳物師が数多く住んでいました。そのため、鍋町と呼ばれるようになったといわれています。

1 6 宮小路（みやこうじ）

宮小路は、松原神社の門前から、宮前町、高梨町の北端沿いに東へ延び、青物町に至るまでの横町です。

1 7 新道（しんみち）

この道は、小田原城三の丸堀沿いの道で、文化14年（1817）小田原の大火（焼失家屋1264軒で、宿場の大半が焼けてしまいました）の時、逃げ道がなく多数の焼死者がでたことから、

新たにつくられたので新道といいました。西の出口は箱根口へ、東は宮前町高札場（こうさつば：幕府の法令などを掲示する場所のこと）の北側に通じています。

1 8 野沢横町（のざわよこちょう） （歴史的町名碑は設置されていません）

野沢横町は、宮前町と千度小路の中央西寄りを東海道から南へ延びている町です。町名の由来は、野沢氏の屋敷があったことによると伝えられています。

1 9 市場横町（いちばよこちょう） （歴史的町名碑は設置されていません）

市場横町は、本町と宮前町と千度小路の境を抜けている横町です。
この横町は、海に臨んでいるので、「魚座（うおざ：魚商人の同業組合）」の魚商が多く住み、その名のとおり魚市場が開かれていたところでした。

2 0 雁木（町）（がんげ（ちょう）） （歴史的町名碑は設置されていません）

雁木（町）は、代官町の東南端から千度小路の西南部を、海岸に並行して延びる横町です。
なお、今でも地元では無量寺裏を東から南に走る道路の海岸側の地域を雁木と呼んでいます。

2 1 南横町（みなみよこちょう）

横町は、中宿町と本町との境を東海道から南へ延び、代官町の西端部を通る横町です。

2 2 安齋町（あんさいちょう）

安齋町は、小田原城絵図の一つである「万治図」（1660年）に初めて地名が見られます。
この地名の由来は、町内に小田原北条氏の侍医（じい：大名などのおかかえ医師）田村安齋（栖）宅があったためといわれています。天正18年（1590）豊臣秀吉の「小田原攻め（豊臣秀吉が九州征伐後に全国統一の総仕上げとして、関東最大の勢力であった小田原北条氏を滅ぼした戦い）」で敗れた小田原北条氏第4代の氏政と弟の氏照は、この家で自害させられたとも伝えられています。

甲州街道筋の脇道

2 3 青物町（あおもものちょう）

この町は、藩主稲葉氏の「永代日記」、延宝3年（1675）の記事に初めて町名が見られます。
「新編相模国風土記稿」（1841年）には、「いにしへ野菜の市立ちしより町名になる」とあります。東京の日本橋にあった「青物町」は、徳川家康のころ江戸の町づくりのため、この土地の人達に移り住んだといわれています。

この町は、商人町の色が濃いところで、旅籠はありませんでした。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は46軒でした。

2 4 一丁田町（いっちょうだちょう）

この町は、天正19年（1591）の文書に初めて町名が見られます。

ここは、商人町の色が濃く、郷宿（ごうやど：公用で藩役所などへ出向く村人が泊まる宿屋）も数軒ありました。町内の東北部に「誓願町」という小町がありますが、この名は、誓願寺門前にあたるため、藩主稲葉氏の「永代日記」の明暦2年（1656）の記事には「誓願寺町」とあります。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は63軒でした。

25 台宿町（だいじくちょう）

この町は、万治年間（1658～60年）の文書に初めて町名が見られます。

ここは、江戸時代からの商人町で、後には衣類を扱う店が多くなりました。町内の東には、小田原北条氏（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））の家臣山上強右衛門（「新編相模国風土記稿」（1841年）によれば、山上強右衛門は、小田原北条氏第4代氏政、第5代氏直に仕えた人で、小田原落城後の天正18年（1590）7月、氏直が高野山に入った時にお供をしたとある）屋敷跡に由来する「山上横町」という横町があり、林学渡辺利右衛門（「新編相模国風土記稿」（1841年）によれば、渡辺利右衛門は、もと伊豆の浪士であったが、享禄年間（1528年～31年）に台宿町に住み着き、一丁田町にある安国寺を中興開基したとある）にちなんだ「林学（林角）小路」がこの町と一丁田町との境を西に向かっていています。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は41軒でした。

26 大工町（だいくちょう）

この町は、万治年間（1658～60年）の文書に初めて町名が見られます。

小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））、この町は、（この時代の大工は、鋳物師、左官、鋳冶工などの諸職の職人頭のこと）が住む町であったために、大工町と呼ばれたと伝えられています。江戸時代から大工だけではなく商人も住むようになりました。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は35軒でした。

27 須藤町（すとうちょう）

この町は、「貞享三年御引渡記録」（1686年）に初めて町名が見られます。

町名の由来は、「新編相模国風土記稿」（1841年）によると、小田原北条氏の総職人頭で、北条氏の領内の職人を統括する立場にあった須藤惣左衛門が住んでいたためとしています。

町並みには商家が多く、江戸時代を通じ有力な商人が住んでいました。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は49軒でした。

28 竹花町（たけのはなちょう）

この町は、藩主稲葉氏の「永代日記」、承応3年（1654）の記事に初めて町名が見られます。

ここは、小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））からある北の城門であった「井細田口」に近く、江戸時代末期には、郷宿（ごうやど：公用で藩役所などへ出向く村人が泊まる宿屋）や日用雑貨品などを売る店が多く、城下町の

出入り口らしい町並みでした。

なお、天保初期（1830年代）、町内の戸数は38軒でした。

甲州道筋の横町及び小町名

29 山上横町（やまがみよこちょう） （歴史的町名碑は設置されていません）

この横町は、一丁田町と台宿町の境を東西に延びる通りで、誓願町寄りをいいます。

町名の由来は、小田原北条氏の東には、小田原北条氏（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））の家臣山上強右衛門（新編相模国風土記稿（1841年）によれば、山上強右衛門は、小田原北条氏第4代氏政、第5代氏直に仕えた人で、小田原落城後の天正18年（1590）7月、氏直が高野山に入った時にお供をしたとある）の屋敷があったためという伝承があります。

30 誓願町（せいがんちょう）

この小町は、藩主稲葉氏の「永代日記」の明暦2年（1656）の記事に「誓願寺町」の名で初めて見られます。

町名の由来は、誓願寺の門前にあたるためといわれています。

31 錦織町（にしごおりちょう）

錦織町は、「東海道分間延絵図」（1789～1806年）に初めて地名が見られます。

地名の由来は、この地内に「錦織明神」（「新編相模国風土記稿」（1841年）によれば、錦織明神は、むかし修験者が火定（かじょう：焼身死）したのをまつたもので、はじめ「西郡明神」と呼ばれていたものを慶安年間（1648～51年）に小田原城主の命令によって、この名になったとある）があったためといわれています。

この社は、明治末期から大正初期のころに市内城山1丁目の「大稲荷神社」に合祀されました。現在使われている「錦通り」の名は、この「錦織明神」や「錦織町」に由来するものです。

なお、明治以降「錦織横町」とも呼ばれています。

武家地・その他

小田原城東部

32 御用所（ごようしょ）

地名の由来は、この地に藩の御用所があったためです。

御用所は、はじめ箱根口門の東隣りにありましたが、その後、三の丸の旧渡辺屋敷跡に移されました。幕府には母屋を囲んで、敷地内に6棟の建物が見られました。なお、この御用所の敷地は、1840坪（6072平方メートル）あまりでした。

3 3 大手前（おおてまえ）

この地名は、小田原城絵図の一つである「延宝図」（1675年）に初めて地名が見られます。

小田原城大手門に続くこの土地は、重臣屋敷が並んでいました。大手門前から東に走る道路は、甲州道と交差し、ここに柵門（大手先黒門）が設けられ、この先は、唐人町に通じていました。

3 4 広小路（ひろこうじ） （歴史的町名碑は設置されていません）

藩主稲葉氏の「永代日記」の慶安4年（1651）の記事に「広小路」が見え、さらに承応2年（1653）の記事に藩主稲葉正則がこの地において「西海子小路の御馬屋の馬を連れて見た」とあります。

この小路は、大手口に付属する城内唯一の幅の広い通りであり、藩士の集合場所にも使われたと思われます。幕末の安政元年（1854）、ペリー来航に備えた藩の軍勢は、この地に集結して大磯に向かっていました。

3 5 割屋敷（わりやしき） （歴史的町名碑は設置されていません）

この地名は、「文化十四丑年類焼録」（1817年）に初めて見られます。小田原藩では、江戸時代後期から面積の広い藩士屋敷を割って小さい屋敷群をつくる動きが数箇所あり、これを割屋敷とよみました。しかし、地名として残ったのは、この大手前の割屋敷だけです。

小田原城絵図の一つである「嘉永図」（1853～59年）には、約7軒の屋敷割が見られます。

3 6 唐人町（とうじんちょう）

町の名は、藩主稲葉氏の「永代日記」の正保2年（1645）の項に「唐人町」とあるのが初出です。この町の一画には、もと城下の有力な町人、中村善四郎の屋敷がありましたが、この通りができたのは、寛永11年（1634）の將軍家光の上洛に先立ち、小田原城大手門に至る御成道（おなりみち：宮家、摂家、將軍の通る道のこと）が新設されたため、この屋敷は他の土地に移りました。この御成道の東端には、土塁をともなった柵門（黒門）が設けられていましたが、その通行は將軍家のみで小田原藩主を含めて一般人は通行できませんでした。

慶長12年（1607）、朝鮮通信使が小田原を通過した際、大蓮寺で一人の中国人が面会し、「50余人が遭難し、小田原に漂着した。この内30余人は帰国したが、残りは許されてこの地に滞在し、唐人村と呼ばれている」（「海槎録」より）と話した「唐人村」が「唐人町」と関係あるのかもしれませんが。

3 7 林学（りんがく）

この地名は、「新編相模国風土記稿」（1841年）に小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））からの住人渡辺利右衛門（新編相模国風土記稿（1841年）によれば、渡辺利右衛門は、もと伊豆の浪士であったが、享祿年間（1528～31年）に台宿町に住み着き、一丁田町にある安国寺を中興開基したとある）の号「林学（林角）」にちなんだものと記されています。なお、この土地は、「林角」「林岳」とも表記されました。

38 林学小路（りんがくこうじ）

林学小路は、小田原城絵図の一つである「加藤図」（1614～32年）に地形が見られ、「新編相模国風土記稿」（1841年）に初めて地名が見られます。南北に走る林学小路の北側には、林学長屋がありました。

39 林学横町（りんがくよこちょう）

この横町は、小田原城絵図の一つである「正保図」（1644～54年）に地形が見られ、「新編相模国風土記稿」（1841年）に初めて地名が見られます。

40 下幸田（したこうだ）

この地名は、小田原城絵図の一つである「延宝図」（1675年）に初めて見られます。地名の由来は、上幸田を含めて小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））、北条氏の家臣幸田氏がこの地に居住したからといわれています。

下幸田は、はじめ下幸田町と呼ばれていましたが、江戸時代後期には、「町」の字を略して下幸田となりました。

この地は、城内に入る門の一つ、幸田門近くにあり、これを守るために隣の上幸田とともに侍町にふさわしいたたずまいとなっていました。

通りの右側を高部屋、左手前を下幸田、その先を上幸田と呼んでいました。

41 上幸田（うわこうだ）

この地名は、小田原城絵図の一つである「延宝図」（1675年）に初めて見られます。地名の由来は、下幸田を含めて小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））、北条氏の家臣幸田氏がこの地に居住したからといわれています。

上幸田は、はじめ上幸田町と呼ばれていましたが、江戸時代後期には、「町」の字を略して上幸田となりました。

南側の幸田門は、小田原北条氏時代には「四ツ門」といわれ、元禄10年（1697）に「幸田門」と改称されました。この地は、幸田門から北に走る道路の両側に開けた長方形の侍町で、隣の下幸田とともに幸田門を守る重要な位置にありました。

42 藪幸田（やぶこうだ）

この地名は、「貞享三年御引渡記録」（1686年）に「竹花裏はんこ町」として見られます。

稲葉氏時代（1632～85年：寛永9年（1632）、稲葉正勝が下野真岡城（栃木県）から移って小田原藩主になり、正勝・正則・正通を経て、貞享2年（1685）、正通が越後高田城（新潟県）に転封されるまでの3代53年間）には、この地を「車地藏小路」と呼びましたが、その由来は、ここにあった伝心庵（でんしんあん：小田原北条氏の氏寺であったが、北条氏滅亡後、大久保氏時代になってこの寺は、寺町（中町）に移され、その跡に永久寺が建立された）の車地藏にちなんだものと考えられます。

文化年間（1819年前後）、この地には、長沼流軍学者山下与太夫も住んでいました。彼は四国から菱（ひし：池や沼に生える水生の一年草で、実は肩平で菱形をしており、両側に鋭い

とげがありました。また、実は食用になる)の種を取り寄せ、忍びの者の侵入を防ぐため小田原城の堀にこれを植えたといわれています。

4 3 半幸町 (はんこうちょう)

この地名は、「文化十四丑年類焼録」(1817年)に初めて見られます。幕末には、道路をはさんで藩士の住まい約16軒がありました。

4 4 高部屋 (たかべや)

この地名は、小田原城絵図の一つである「万治図」(1660年)に初めて「御鷹部屋」の名で見られます。

稲葉氏時代(1632～85年:寛永9年(1632)、稲葉正勝が下野真岡城(栃木県)から移って小田原藩主になり、正勝・正則・正通を経て、貞享2年(1685)、正通が越後高田城(新潟県)に転封されるまでの3代53年間)、上幸田の北寄りの一部に鷹匠の屋敷が設けられ、このためこの地域は、「鷹部屋」、「高部屋」などと呼ばれるようになりました。しかし、江戸時代半ば以降は、もっぱら侍屋敷でした。

なお、北隣にあった永久寺も古くは高部屋(「新編相模国風土記稿」(1841年)には永久寺持ちの土地として谷津村の地域としてしるされている)の一画と考えられていました。

4 5 揚土 (あげつち)

「稲葉日記・書抜」の剥古2年(1653年)に「上ヶ土」とあり、この地に番所があったと記されています。

地名の由来は、小田原城三の丸の空堀を造成した時の土やそこに流入した土砂をこの土地に埋めたためこの名がついたといわれています。

この地は、小田原城の城門の一つであった「谷津口門」に近く、小田原城を守るための重要な地点でした。

なお、揚土に植栽されていた梅の実は、種子が小さく、果肉が厚いため、「揚土の梅」と呼び、食用に珍重されたといわれます。

4 6 新蔵 (しんくら)

江戸時代の承応、明暦の頃(1652～57年)、稲葉氏がこの地に蔵屋敷を建設しました。そこで、小田原城三の丸弁財天曲輪にすでにあった蔵を本(元)蔵と呼び、こちらを新蔵と呼ぶようになりました。

また、この地を新蔵屋敷ともいい、幕末には、8棟が並んでいました。

この蔵には、ききんの際の救急用の稗(ひえ)なども保存したものか、古老の中には「お稗蔵」と呼ぶ人もいます。

4 7 日向屋敷 (ひゅうがやしき)

この地名は、「貞享三年御引渡記録」(1686年)に初めて見られます。

地名の由来は、慶長19年(1614)、小田原城主大久保忠隣(江戸幕府の初代将軍徳川家

康は、慶長 10 年（1605）「大御所」として将軍を引退しましたが、幕府の実権はにぎっていた。そこで、2 代将軍秀忠と家康による二頭政治があらわれてきた時、大久保忠隣は 2 代将軍の補佐役であり、大御所付きの補佐役は本多正信だった。当然この二人の間に対立がはじまり、慶長 19 年（1614）に忠隣が失脚した）が改易（罰をうけ、城を取り上げられること）となった時、その夫人「日向御前（ひゅうがごぜん：石川日向守の娘で、この屋敷が谷津にあったため「お谷津様」とも呼ばれた）」が閉居した屋敷跡であったためといわれています。

貞享 3 年（1686）に大久保氏が再び小田原藩主になると、この一部に割屋敷をつくりましたが、それ以後ここが日向屋敷と呼ばれるようになりました。江戸時代末期には約 14 軒の藩士の住まいがありました。

48 元蔵（もとぐら）

この地名は、小田原城絵図の一つである「万治図」（1660 年）に初めて見られます。

この名は、小田原藩主稲葉氏時代（1632～85 年：寛永 9 年（1632）、稲葉正勝が下野真岡城（栃木県）から移って小田原藩主になり、正勝・正則・正通を経て、貞享 2 年（1685）、正通が越後高田城（新潟県）に転封されるまでの 3 代 53 年間）、小田原城三の丸堀の北方に「新蔵」がつくられたため呼ばれるようになったと考えられています。

新旧 2 箇所蔵は、米蔵屋敷として使われていましたが、江戸時代末期になると蔵の機能は新蔵に移り、この元蔵は 5 軒ほどの藩士屋敷に分割されました。この頃、元蔵の名は弁財天の地名に含まれます。なお、元蔵は、「本蔵」とも記されたことがあります。

49 弁財天（べんざいてん）

この地名は、「貞享三年御引渡記録」（1686 年）に「弁財天曲輪」として初めて見られません。

この地は、武家地ですが、江戸時代初めは、「弁財天曲輪」と呼ばれていました。

元禄 10 年（1697）、後期大久保氏（大久保忠隣のひ孫忠朝が下総佐倉城（千葉県）から移って小田原城主となり、その後 10 代で明治維新を迎えるが、この約 180 年間の大久保氏のこと）が藩主になった頃、蓮池の南側にある「評定所曲輪」を「弁財天曲輪」と名称を変えたため、ここを単に「弁財天」と呼ぶようになりました。

幕末には、この地に 6,7 軒ほどの中堅藩士の屋敷があり、二宮尊徳はここに住んでいた三幣又左衛門を「弁財天の旦那（だんな）」と呼んでいました。

なお、ここが藩主付きの女性の隠居所となったときもあります。

50 金籠小路（かなべらこうじ）

この地名の由来は、この小路がほぼ直線状で行き止まりとなっていて、その形が籠（へら）に似ているためこの名がついたといわれています。

稲葉氏時代（1632～85 年：寛永 9 年（1632）、稲葉正勝が下野岡城（栃木県）から移って小田原藩主になり、正勝・正則・正通を経て、貞享 2 年（1685）、正通が越後高田城（新潟県）に転封されるまでの 3 代 53 年間）には、この地に藩の御細工所（藩の革細工物や木工

細工などの作業所) がありました。後期大久保時代(1686~1871年:大久保忠隣のひ孫忠朝が下総佐倉城(千葉県)から移って小田原城主となり、その後10代で明治維新を迎えるが、この約180年間のこと)になると、藩士の家が8軒(「貞享三年御引渡記録」(1686年))ほど建っていました。

5 1 鍋弦小路(なべづるこうじ)

この地名は、小田原絵図の一つである「天保図」(1839年前後)に初めて見られます。

地名の由来は、揚士道に面する小路の姿がコの字型で、鍋の釣手に似ているためこの名がついたといわれています。

江戸時代末期には、この小路の両側に20軒ほどの藩士の家がありました。

5 2 入谷津(いりやつ)

藩主稲葉氏の「永代日記」の承応2年(1653)の項に「谷入口に番所を置く」とあります。

この「谷」は「ヤツ」で、「貞享三年御引渡記録」(1686年)に「谷津」の地名で記されています。古くは、現在呼んでいる谷津、入谷津の広い範囲をいっていたようです。しかし、「貞享三年御引渡記録」(1686年)に記された「谷津」は、後に武家地の「入谷津」に変わった範囲です。江戸時代末期には、この入谷津に藩士の住まいが12軒ほどありました。

5 3 愛宕下(あたごした)

この地の西側にあった小高い山の上には、古くから摩利支天(まりしてん:仏教の守護神の一つで、別に多聞天とも呼ばれています。武士の守護神として信仰された)が祀られ、その東に安国寺があつて、この山を愛宕山と呼びました。

この山の東側山すそを愛宕下と呼び、稲葉氏時代(1632~85年:寛永9年(1632)、稲葉正勝が下野真岡城(栃木県)から移って小田原藩主になり、正勝・正則・正通を経て、貞享2年(1685)、正通が越後高田城(新潟県)に転封されるまでの3代53年間)は、武家屋敷が点在していたものの、田園色の濃いところでした。

しかし、江戸時代後期になると、道路の両側に組長屋がつくられ、武家地の性格が強まったため、愛宕下の地名は、武家屋敷地のことをさすようになったようです。なお、この地を「愛宕通り」とも呼びました。

5 4 牢屋町(ろうやちょう) (歴史的町名碑は設置されていません)

この地名は、「貞享三年御引渡記録」(1686年)に「籠屋町」と記され初めて見られます。

地名の由来は、この町並みの東南側に藩の牢屋敷があつたことによります。

5 5 本源寺前(ほんげんじまえ)

この地名は、「文化十四丑年類焼録」(1817年)に初めて見られます。地名の由来は、小田原城主大久保忠朝が貞享3年(1686)に移した内庵(江戸時代の大名大久保氏と関係の深い寺で、大久保氏の転封(転任)とともに移動していった)の一つであつた「本源寺」にちなむものです。

本源寺前は、「堀川通り」、「内川通り」とも呼ばれていました。

5 6 花ノ木 (はなのき)

この地名は、小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏 5 代（1495～1590 年））の「北条幻庵文書」に初めて見られます。

現在まで残されている文書の中には、「花ノ木」や「花ノ木の蓮乗（上）院」、あるいは「小田原花木 安齋新五郎」など地名とともに人の名が記されています。

なお、小田原北条氏時代の花ノ木は、蓮上院の寺地でしたが、後に縮小して、武家地などに変えたものと考えられます。

5 7 花ノ木横町 (はなのきよこちょう) (歴史的町名碑は設置されていません)

この地名は、「東海道分間延絵図」（1789～1806 年）に初めて見られます。

花ノ木横町は、東海道筋の新宿町から北西方向に入り、蓮上院に至る道路沿いの横町です。

5 8 瓦屋敷 (かわらやしき) (歴史的町名碑は設置されていません)

この地名は、「文化十四丑年類焼録」（1817 年）に初めて見られます。「相中雑誌」（1839～43 年）には「花木・瓦屋敷・大新馬場・竹ノ花・廣小路通大土手今猶存ス」とあり、小田原城総構（「小田原攻め」に備え、小田原北条氏が築いたもので、城下町を取り込み、自然地形を利用して、土塁、堀を囲わせた城構えをいう）の土塁を示す位置として、この地名を用いています。

5 9 七枚橋 (しちまいばし)

この地名は、「文化十四丑年類焼録」（1817 年）に初めて見られます。橋は、抹香町から大新馬場に通づる道路と護摩堂川（ごまどうがわ：小田原城三の丸の水を排水するために設けられた水路で、現在では見られない）とが交差するところに、7 枚の切石を並べてかけられていたそうです。この橋の名が、後にはこの付近の地名になりました。

6 0 八反畑 (ほったんばた)

この地名は、「貞享三年御引渡記録」（1686 年）に初めて見られます。

この土地は、もと周囲を武家地などに囲まれた四辺形の区域で、小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏 5 代（1495～1590 年））には、「大雲軒」（市内板橋の興徳寺の前身）という寺がありました。

江戸時代に入り、稲葉氏時代（1632～85 年：寛永 9 年（1632）、稲葉正勝が下野真岡城（栃木県）から移って小田原藩主になり、正勝・正則・正通を経て、貞享 2 年（1685）、正通が越後高田城（新潟県）に転封されるまでの 3 代 53 年間）には、藩の蔵屋敷（年貢米などを保管するために設けられた倉庫と管理事務所）や菜園、茶園などに利用されました。

さらに、後期大久保氏時代（1686～1871 年：大久保忠隣のひ孫忠朝が下総佐倉城（千葉県）から移って小田原城主となり、その後 10 代で明治維新を迎えるが、この約 180 年間のこと）になると、武家地になり、本源寺の東横から裏手にかけて割屋敷が設けられました。

6 1 三軒屋（さんけんや） （歴史的町名碑は設置されていません）

三軒屋の区画は、小田原絵図の一つである「万治図」（1660年）に見られます。

また、地名は、「文化十四丑年類焼録」（1817年）にはじめて見られます。この由来は、大工町の東端から北に入る路地の突き当たりに、三軒の武家屋敷があったことによるものといわれています。

この三軒屋は、江戸時代末期に14軒ほどに細分化されました。このため、組長屋は「新長屋」とも呼ばれました。

6 2 郡組（こおりぐみ） （歴史的町名碑は設置されていません）

地名の由来は、ここに郡奉行（こおりぶぎょう：農民を支配する藩側の責任者）支配の下役人たちが住んでいたため、その数は約20軒でした。郡組は、明治2年に「郡卒」（郡奉行の下で働く小役人（足軽））に改称されました。

6 3 稲荷組（いなりぐみ） （歴史的町名碑は設置されていません）

地名の由来は、この土地の路地の奥に稲荷の小祠があったためといわれています。ここには、先筒頭（さきづつかしら：足軽の鉄砲隊を指揮する中堅の藩士）の配下が住み、その数は約20軒でした。

6 4 手代町（てだいちょう）

この地名は、小田原絵図の一つである「万治図」（1660年）に「手代屋敷」の名であられ、「手代町」として初めて見られるのは、「東海道分間延絵図」（1789～1806年）からです。

地名の由来は、この地内の北西角に「手代」（てだい：ここでいう手代は商家の者ではなく、奉行や代官の下役（足軽）のこと）が住んでいたためといわれています。

なお、「新編相模国風土記稿」（1841年）では、地名を「てだいまち」としていますので、古くは「まち」と呼んでいたのでしょうか。

6 5 中新馬場（なかしんばば） （歴史的町名碑は設置されていません）

この地名は、小田原絵図の一つである「延宝図」（1675年）に初めて見られます。

地名のおこりは、古くはここが馬場に利用されていたためと考えられます。

稲葉氏時代（1632～85年：寛永9年（1632）、稲葉正勝が下野真岡城（栃木県）から移って小田原藩主になり、正勝・正則・正通を経て、貞享2年（1685）、正通が越後高田城（新潟県）に転封されるまでの3代53年間）には、12軒ほどの屋敷があり、幕末には大久保藩士の屋敷が約16軒ありました。

6 6 大新馬場（おおしんばば）

この地名は、小田原絵図の一つである「延宝図」（1675年）に「上新馬場」の名で初めて見られ、その後、「大新馬場」となりました。地名のおこりは、中新馬場より遅く発生したためにこれと区別する意味で大新馬場となったと考えられます。

この土地は、はじめ屋敷割に余裕がありましたが、江戸時代末期になると土地利用が進んで、北側の矢場や江戸組ができたと思われます。

なお、藩主稲葉氏の「永代日記」の天和2年（1682）3月の記事に「竹花町に近く新馬場があり、足軽小屋を設けた」とあるのは、大新馬場と考えられます。

67 先町（さきちょう）

甲州道の両側、竹花町の町地境までは、表組の先手筒（鉄砲を扱う者）2軒、先手弓（弓を扱う者）1軒、あわせて3軒の組長屋があったので、これを略して「先町」といいました。

68 裏組（うらぐみ）

甲州道筋の御組長屋を「表組」と呼んだのに対して、こちらはこれと区別するため「裏組」といいました。

持筒（鉄砲を扱う者）や持弓（弓を扱う者）の人達が住む組長屋でした。

69 竹花広小路（たけのはなひろこうじ）

井細田口内側の甲州道に、裏組からの道が交差する地点より井細田口の木戸までの間は、特に道幅が広がっていました。この間を竹花広小路と呼んでいました。

70 渋取（しぶとり）

この地名は、「北条五代記」（1641年）に初めて「しぼとり」の名で見られます。

地名の由来は、はっきりしませんが、「相中雑誌」（1839～43年）には、「金渋取」と記されていることから、金渋（水酸化鉄のことで、染料や顔料として使われていた）が生ずる土地という意味に関係するものと考えられます。

渋取は、もと花ノ木の北方の広い区域をこの名で呼んでいましたが、天正18年（1590）の豊臣秀吉の「小田原攻め」（豊臣秀吉が九州征伐後に全国統一の総仕上げとして、関東最大の勢力であった小田原北条氏を滅ぼした戦い）に備えて、小田原城総構（「小田原攻め」に備え、小田原北条氏が築いたもので、城下町を取り込み、自然地形を利用して、土塁、堀を囲わせた城構えをいう）を築いた時、この区域は、総構の内側と外側に分割されました。

1) 総構の内側

総構内側の渋取はかつて町人地でしたが、稲葉氏が小田原城主の頃、武家地に変えられ、その範囲も「渋取口」のあったごく限られた部分をさすようになりました。

2) 総構の外側

この渋取は、稲葉氏が小田原城主の頃、大工町の持添新田（町人によって開発された田）として堀跡が開発され、地名として残りました。

小田原城西部

7 1 安齋小路（あんさいこうじ）

この地名は、小田原絵図の一つである「延宝図」（1675年）に初めて見られます。地名の由来は、この地内に、小田原北条氏の侍医（じい：大名などのおかかえ医師）田村安齋（栖）宅があったためといわれています。

なお、小田原北条氏（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代（1495～1590年））第4代の氏政と弟の氏照は、豊臣秀吉の「小田原攻め」（豊臣秀吉が九州征伐後に全国統一の総仕上げとして、関東最大の勢力であった小田原北条氏を滅ぼした戦い）に敗れた後、この家で自害させられたと伝えられています。

7 2 町組（まちぐみ）

この土地は、江戸時代のはじめ蔵屋敷でしたが、「貞享三年御引渡記録」（1686年）の頃には「同心小屋」や「町同心長屋」と呼ばれていました。「町組長屋」の名が見られるのは、小田原城絵図の一つである「天保図」（1839年）からです。

町組とは、町奉行（町人を支配する藩側の責任者）配下の町方同心組（奉行などの配下で、与力の下で働く下級役人をいう）の長屋のことです。

7 3 水主長屋（かこながや）

この地名は、小田原城絵図の一つである「万治図」（1660年）に「御船小屋」と並んで「水主（一般に水軍の性格をもった船乗り）長屋」の名が見られます。これが地名になったのは、いつ頃かわかりません。

江戸時代末期、ここには、藩士の家1軒、長屋3軒のほかに水車小屋（車屋ともいう）がありました。この水車小屋は、浜新田のために使われたものと考えられます。なお、この土地は、水主屋敷とも呼びました。

7 4 西海子小路（さいかちこうじ）

地名は、藩主稲葉氏の「永代日記」の承応2年（1653年）に見えますが、藩の鉄砲矢場、弓場があり、武技の練習場であったようです。その後、大久保氏の後期には、第一線で活躍する中堅藩士の武家屋敷となり、江戸時代末期には13軒（文久図では大蓮寺を含めて18軒）ほどが道の両側に並んでいました。

なお、地名の由来は、この地に「さいかち」（マメ科の落葉高木）の木が植えられていたためといわれています。

7 5 狩野殿小路（かのどのこうじ）・狩野小路（かのうこうじ）

この土地名は、「貞享三年御引渡記録」（1686年）に初めて見られます。この一帯は、武家地で中級の藩士が住んでいました。

町名の由来について、「新編相模国風土記稿」（1841年）には、この地が小田原北条氏の家臣狩野宅跡のためと記され、また、「狩野古法眼」（絵師狩野派の第2代元信（1476から1559

年)で、室町将軍に仕え、土佐光信のむすめむこになり、「法眼」に叙された)が住んでいたという地元の伝承をも伝えています。

なお、この地は、「金殿小路(かねどのこうじ)」とも書かれました。

76 諸白小路(もろはくこうじ)

この地名は、「貞享三年御引渡記録」(1686年)に初めて見られます。小田原藩主稲葉正則の時代、この地に上方から杜氏(とうじ:酒をつくる頭または職人)を招いて諸白酒(もろはくしゅ:仕込み用の蒸米も麴米もよく精白したもので醸造した酒)をつくらせたことから、この地名が生まれたといわれています。

道の両側は、武家地で、中級の藩士が住んでいました。

77 天神小路(てんじんこうじ)

この地名は、「貞享三年御引渡記録」(1686年)に初めて御花畑小路の名であられ、その後「東海道分間延絵図」(1789~1806年)から天神小路と呼ばれました。地名の由来は、東海道を隔てて北方にある「天神社」にちなんだものです。

道の両側は、武家地で、中級の藩士が住んでいました。

なお、御花畑小路の名は、西海子小路から御花畑入口までの短い区間の呼び名として残りました。

78 御厩小路(おうまやこうじ)

この地名は、「寛文九年火災報告に関する文書」(1669年)に初めて見られます。地名の由来は、西海子小路がこの小路に交差した地点の西側に小田原藩の馬屋があったことによります。

承応2年(1653年)、小田原藩主稲葉正則がこの地に馬を見に来た記録もあります。この小路は熱海街道(伊豆山、熱海に達する道路)の起点にあたりますが、小田原では御厩小路の名が永く使われていました。

79 浜蔵(はまぐら) (歴史的町名碑は設置されていません)

この地名は、古くは浜小屋といわれ、「貞享三年御引渡記録」(1686年)に浜蔵の名が見られます。

江戸時代末期には、この地に8棟の倉庫らしい建物がありました。

文久3年(1863)の文書には、この倉庫に大筒(おおづつ:大砲のこと) (1貫目筒) 1挺が保管されていたことが記されているので、武器庫の性格をもつ蔵と考えられます。

80 御花畑(おはなばた)

この地は、もと小田原北条氏の家臣松田氏の屋敷があったところです。その後、寛永11年(1634)、京都に上る将軍徳川家光を迎えた際に、「御花畑の室において宴を催した」とあります。

「稲葉日記・書抜」の寛永20年(1643)の頃に「お花畑」とあり、藩主稲葉正則は、この

地を参勤交代で通る大名の迎賓館として、また、鉄砲・弓・水泳など自身の鍛錬の場として使っていました。その後、江戸時代中期には廃止され武家屋敷となり、末期には長屋や御作事小屋（藩の工事に関する作業場のこと）も建てられました。さらに、この地の南西側の隣地に御浜御殿が設けられました。

8 1 御浜御殿（おはまごてん） （歴史的町名碑は設置されていません）

この地名は、幕末、藩主の下屋敷である御浜御殿がこの地に設けられたので、この名がつかれました。この御殿は、文久 2 年（1862）の参勤交代制の廃止とともに、江戸より戻ることとなった藩主大久保忠礼の奥方「浄心院」の屋敷として建てられたものですが、慶応元年（1865）、將軍徳川家茂が小田原城（二の丸御殿に宿泊した際、藩主は御花畑に帰館したという記録があり、この御浜御殿のことと考えられます。

なお、この地の西隣の土地を「御殿庭（ごてんにわ）」とも呼びます。

8 2 大久寺小路（だいきゅうじこうじ）

この地名は、「貞享三年御引渡記録」（1686 年）に初めて見られます。地名の由来は、小田原城主大久保忠世が建立し、前期大久保家（天正 18 年（1590）の豊臣秀吉の小田原攻めによって、小田原北条氏が滅び、その年徳川家康の家臣大久保忠世が遠州二俣城（静岡県）から移って小田原藩主となり、2 代忠隣のととき慶長 19 年（1614）家康の怒りにふれて所領を没収されて配流となるまでの 27 年間）の菩提寺でもある大久寺の門前の小路であったためこの名があります。

8 3 御組長屋（おくみながや）

この地名は、小田原城絵図の一つである「天保図」（1839 年）に初めて見られます。

江戸時代前、小田原城下の山王口、板橋口や井細田口の三つの出入り口の沿道には、先手筒（さきてづつ：鉄砲を扱う者）や先手弓（さきてゆみ：弓を扱う者）などの組の者が住む御組長屋（新宿町組・山角町組・竹花町組）が設けられていました。ここの御組長屋（山角町組）は、その中の一つで、それが地名となって残ったのはここだけです。

ここの御組長屋には表組と裏組との区別がありました。

8 4 天神下（てんじんした） （歴史的町名碑は設置されていません）

この地名は、小田原城絵図の一つである「天保図」（1839 年）に初めて見られます。地名の由来は、北側の天神山の中腹に室町時代以前からある「天神社」にちなんだものです。

天神下は、箱根口門が南向きであった江戸時代初期、その正面にあたっていて、稲葉氏重臣が居住し、その後も重臣屋敷となっていました。

しかし、江戸時代末期に武家屋敷を割って組長屋を設けるようになったとき、ここの組長屋となりました。

8 5 瓦長屋（かわらながや） （歴史的町名碑は設置されていません）

この土地には、延宝初年（1673 年）初めて町屋がつけられましたが、やがて武家屋敷とし

ての瓦長屋に変わりました。

町名の由来は、箱根口門に近く、また文化 14 年（1817）の小田原城下の大火（焼失家屋が 1264 軒で、宿揚の大半が焼失した）で類焼した苦い経験から、防火用に屋根瓦を使用したことにちなんだものといわれています。

8 6 隅屋敷（すみやしき）

小田原城の二の丸と三の丸の堀に挟まれた場所は、江戸時代には藩の重臣屋敷で占められ、ほぼ長方形の区画の屋敷が並んでいました。

しかし、南西角のこの一角だけは三の丸の堀が屈折するため屋敷は方形ならず、三角形の屋敷となりました。後期大久保氏時代（1686～1871 年：大久保忠隣のひ孫忠朝が下総佐倉城（千葉県）から移って小田原城主となり、その後 10 代で明治維新を迎えるが、この約 180 年間の大久保氏のこと）になると、ここを区分けして割屋敷とし、文政年間（1818～29 年）には 5 軒の藩士の住まいがありました。

藩主稲葉氏の「永代日記」の明暦 2 年（1656）の項に「角屋敷」とあり、「武家屋敷を二軒に割った」とあります。

8 7 鉄砲矢場（てっぽうやば）

この地名は、小田原城絵図の一つである「嘉永図」（1853～67 年）に初めて見られます。

この地は、小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏 5 代（1495～1590 年））につくられた小田原城三の丸空堀が接する西側には「二重外張（ふたひとつばり）」と呼ばれる虎口（こぐち：城の出入り口）がありました。この地の東端に近い光円寺新墓地には、大外郭の空堀の造構が現在も見られます。

なお、この地が矢場として利用されたかどうかは、明らかではありません。

8 8 天神山（てんじんやま）

この地名は、「相中雑誌」（1839～43 年）に初めて見られます。

地名の由来は、この地の南側中腹に天神社が祀られていたので、この名がついたといわれています。この社には、室町時代の天神画像が伝えられており、この地名の古いことがわかります。

なお、天神山には社の背後に小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏 5 代（1495～1590 年））の三の丸空堀が走っています。また、天神社から東海道へ通じる路を天神横町（町人地）といい、さらに東海道を越し、西海子小路に通ずる御花畑小路を江戸時代には天神小路と呼びかえるなど、天神社にちなむ地名が多くあります。

8 9 小峯（こみね）

「小峯」と呼ばれた範囲はかなり広い地域をいい、時代によってはその範囲の広狭の差が著しく変化しました。

この地名は、箱根外輪山の塔ノ峰（箱根湯本）から東へ下る尾根のうち、中央の八幡山筋（現県立小田原高校）、南の天神山筋およびこの両者に挟まれた小峰畑の谷に色濃く残ってい

ます。

「新編武蔵国風土記稿」（1827年）永川村の項に「明応中小田原城主大森氏頼、実頼父子（大森氏は静岡県駿東郡藍沢庄の豪族で、上杉禅秀の乱の時、関東管領足利利持氏を助けて功労をたて土肥、土屋党を追って小田原地方を支配し、小田原城を築いた。明応23年（1416）から5代80年間、この城に拠って南関東の有力武家となった。しかし、明応4年（1495）、北条早雲によって滅ぼされた）は小田原城にいて、次男宗頼は小峯に住んだ」とありますが、その位置は不明です。また、藩主稲葉氏の「永代日記」の承応2年（1653）の項には「こみね口」、翌3年の項には「小峯小屋」などがあります。

武家地としての小峯には、藩の重臣の屋敷が並んでいました。屋敷の配置は、小田原城絵図の一つである「加藤図」（1614～32年）・「正保図」（1644～54年）・「万治図」（1660年）・「寛文図」（1672年）などからあらわれ、「貞享三年御引渡記録」（1686年）に地域名として「小峯」がみられます。江戸時代後期、二宮尊徳翁は最初に仕えた服部家（旧城内高等学校の北側）を「小峯」と呼んでいたと伝えられています。

明治8年の町名の変更では、幸1丁目の構成区域の一つとして、この小峯がありました。

90 御鐘ノ台（おかねのだい）

この地は、慶長19年（1614）から寛永9年（1632）までの間の小田原城の姿を伝える加藤図では、「こむね山」と、また、江戸時代前期（1630～1660年）の「北条五代記」には一部誇張を含めながらも「西は富士（板橋の富士山）と小峯山つづきなり、二つの山の間に三重の堀をほり、小峯山を城中に入れ」と記されています。

このように、この地は、天正18年（1590）豊臣秀吉の小田原攻め（豊臣秀吉が九州征伐後に全国統一の総仕上げとして、関東最大の勢力であった小田原北条氏を滅ぼした戦い）に備え、小田原北条氏が小田原城総構（城下町を取り込み、自然地形を利用して、土塁、堀を囲わせた城構えをいう）を設けた時、城域に取り入れられたところです。

場所は、総構の西端に当たり、また高地（標高120メートル）にあつて東西に細長い台地です。周囲には、中世の小田原城郭の遺構が最もよく残っていて、南側には空堀や大型の矢倉台跡が、西側には外張形（とぼりがた：戸張とは、戸をつけた門のある入り口のこと）の堀底道があり、さらに所々に砲丸石（中世の諸城跡にみられ、守備の重要な場所に集められていることが多いので、戦闘に用いられたと考えられている。一般的に握りこぶし大か、やや大型の肩平な石が多い）が散在しています。

なお、地名の由来は、小田原攻めのときこの地に陣鐘（戦陣で、戦闘の合図に使用した鐘）がおかれていたためといわれています。

91 毒榎平（どくえだいら）

この地名は、小田原城絵図の一つである「加藤図」（1614～32年）に「どくえ山」の名で初めて見られます。

また、「延宝図」（1675年）には、旧M.R.Aハウスアジアセンター付近の外、ここに大きく「小峯山」と記しています。

明治年代などの地籍図では、「字毒榎」または、「毒榎平」の名で見られます。この地は、天

正 18 年（1590）、豊臣秀吉の小田原攻め（豊臣秀吉が九州征伐後に全国統一の総仕上げとして、関東最大の勢力であった小田原北条氏を滅ぼした戦い）に備えて設けられた大外郭ができる前までは、小田原城の最西端にあたる場所でした。西側には巨大な空堀と土塁が今も残っており、小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏 5 代（1495～1590 年））の小田原城にとって、この地が重要であったとわかります。

なお、昭和年代には小峰森林公園や小峯浄水場となったところです。

「毒榎」は、アブラギリの別名で、菜種油が普及する以前に防水用の油の原料として、広く植えられました。

毒榎平と「毒榎」の名との関連は、はっきりしていません。

9 2 小峯畑（こみねばた）

この地は、小田原城絵図の一つである「加藤図」（1614～32 年）や「延宝図」（1675 年）の頃から畑としてあらわれ、「文政図」（1823 年）に初めて地名が見られます。ここは、三方を山に囲まれた現相洋高等学校から競輪場寸近までの盆地状の谷間で、早くから土地の削平が行われていたらしく、この土地の土砂を城の低地部の改修用に運び出したという江戸時代の伝承もあります。

「嘉永図」（1853～67 年）には、「小峯畑調練場」があらわれ、小田原藩兵の軍事訓練の場所となりました。

さらに、大正時代には、ここに「小峯公園」が設けられました。

なお、藩主稲葉氏の「永代日記」の承応 2 年（1653）の項には、「こみね口」、翌年 3 年には「小峯小屋」とあって、足軽番所があり、「小峯で鉄砲を打たせた」ともあります。この場所は、この地と武家屋敷としての「小峯」との境付近と考えられます。

9 3 八幡山（はちまんやま）

この地名は、小田原城絵図の一つである「正保図」（1644～54 年）に初めて見られます。地名の由来は、この地に 2 つの八幡社があり、これにちなんだものといわれています。

その一つは、北條氏康が勧請（かんじょう：神仏の霊を移して祀ること）したと伝えられ、県立小田原高等学校東側下段にありました。また、もう一つの八幡社は、江戸時代初期、小田原城主大久保忠世が祀ったもので、同校北側にありました。後者の大久保氏の社は、徳川家康の長男三郎信康（永禄 2 年（1559）、徳川家康の長男として駿府に生まれ、後に岡崎城に移って織田信長の娘と結婚した。信康は、豪勇の武将だったが、天正 7 年（1579）、小田原城主大久保忠世が二侯（静岡県天竜市）城主の時に信長の命令で信康を自害させた）の霊を鎮めるものであったといい、江戸時代には「新御宮」または「若宮」とも呼ばれていました。これに対して、前者の北条家の社は、「本丸八幡」といって区別していました。

なお、この地は「八幡」とも呼ばれてきました。

9 4 鍛冶曲輪（かじくるわ）

小田原北条氏時代（北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏 5 代（1495～1590 年））の小田原城は、丘陵地と低地を含む広大な城郭でしたが、主力は、丘陵地に置かれました。

鍛冶曲輪は、この丘陵地の二の丸外郭と三の丸外郭を兼ねた内側にあつて重要な曲輪であつたと考えられます。この地には、寛文2年(1662年)以降、刀工藤原清平(ふじわらのきよひら:出身地は加賀(石川県)で、承応1年(1652)には江戸に住んでいました。寛文2年(1662)、清平は小田原城主稲葉正則に召し抱えられ、小田原城内の八幡山に移り住み、刀を製作した)が住んでいたといわれており、江戸時代末期頃には、「清平屋敷跡」と伝えられている場所もありました。なお、「相州八幡山住藤原清平」銘をもつ刀剣も残っています。

また、「清平屋敷跡」から「ホト石」と呼ばれるつくばいのような石が出土したため、このあたりは「石の丸」との別称もあります。この「ホト石」は、現在小田原城本丸の広場に保存されています。

9 5 八幡曲輪(はちまんくるわ)

この地名は、「貞享三年御引渡記録」(1686年)に初めて見られます。この地は、古くは「裏大門」と呼ばれたところで、東西に延びる坂道の両側には藩の中堅の武士の屋敷があり、江戸時代を通じて5軒の住まいがありました。しかし、武家地としての八幡曲輪という呼び方は、幕末には単に「八幡山」と変わりました。

9 6 天守裏(てんしゅうら)

この地名は、小田原絵図の一つである「嘉永図」(1853~67年)に初めて見られます。

この地は、もとは天守台の裏手に直接続いていましたが、その後現在のJR線の開通工事によって断ち切られました。

天守裏には、八幡山古郭と呼ばれる小田原城創始期の城跡がある地域で、中央には古郭が走っており、その両側には小規模な曲輪群があります。

9 7 桜ノ馬場(さくらのばば) (歴史的町名碑は設置されていません)

この地名で呼ばれる狭長な平坦地は、全国的に分布し、しかも城郭の中やその周辺に多く見られます。

一般的にはこのようなところに馬場を設けていますが、この桜ノ馬場が馬場として使われたかどうかは明らかではありません。この地の付近には、小田原北条氏時代(北条早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の北条氏5代(1495~1590年))の虎口(こぐち:城の出入り口)の一つである「荻窪口」と考えられる城郭遺構があります。

9 8 御前曲輪(ごぜんくるわ)

この地は、谷間の窪地で、以前は土塁や空堀がある城郭遺でした。

昭和27年、市営陸上競技場の造成工事に、この楕円形の凹地の最奥部から炉壇をもつ敷石遺構が発見されました。この遺構は、現在陸上競技場の管理棟前に保存されていますが、中世の祭祀遺構と考えられます。

城郭でいう御前曲輪とは、城内で神仏を祭る場所であつたと考えられ、当時は、戦いに際して神意を占って行動することが多く、城内祭祀は特に重要視されていました。

ただ、この地の御前曲輪は、他の中世城郭の御前曲輪と比較すると、規模が極めて大きく、

城中の最高地に設けず凹地を選んでいるなど、特異な部分があります。なお、この曲輪には、「人質曲輪」という別称もあります。

9 9 山ノ神（やまのかみ）・山ノ神台（やまのかみだい）（歴史的町名碑は設置されていません）

この地名は、「新編相模国風土記稿」（1841年）に初めて見られます。

地名の由来は、この地に山神祠が祀られていたためといわれています。この台地は、城下を眼下に見下ろす高台で、城郭遺構は見当たらないものの、小田原城大外郭遺構の中でも重要な場所であったと考えられます。

なお、「寛永諸家譜」（1641～43年）によると、天正18年（1590）の小田原戦役当時、この付近を守備していた北条方の武将、富永重吉が城外へ出撃したことが記されています。

また、この付近には「市屋敷」や「野村屋敷」などの地名が残っています。

この文章は小田原市教育委員会が平成元年3月20日に発行した「城下町・宿場町 小田原の町名・地名」を編集したものです。